至誠沈勇

米内光政会会報　第二号



写真提供：盛岡市先人記念館

目　次

令和三年度（第二回）総会　米内光政会編集部……1
米内光政をめぐる人々Ⅱ　平野ユキ子……2
米内さんの銀行命名顛末記　駒木忍……14
米内光政とその周辺②：息子を厳しく育てた母……16
ゆかりの品・場所のご紹介……18
ご寄付のご紹介……18
年次事業実施状況……19

■令和三年度（第二回）総会

米内光政会編集部

米内光政会第二回総会は、令和三年十一月二十八日（日）盛岡市愛宕下の盛岡グランドホテルにおいて、会員七〇名の出席のもとに開催されました。

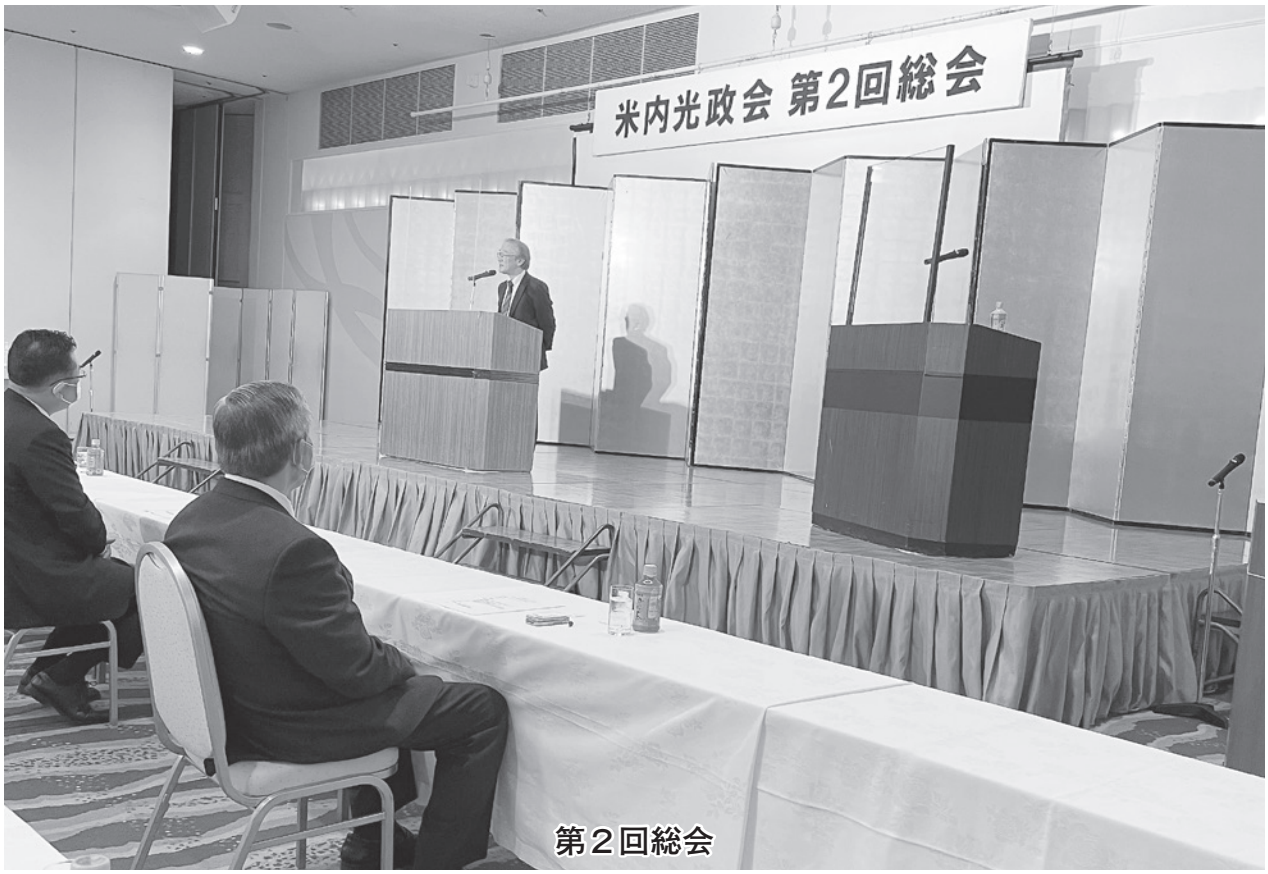
総会は司会の菊田隆盛岡市議会議員の開会宣言の後、藤井茂会長による挨拶、高橋昌造矢巾町長のご祝辞、祝電の披露に続いて菊田議員の明快な議事進行により滞りなく進行され、事務局からの令和三年度の決算報告、令和四年度の予算案、今後の活動予定について議案が提出され、承認されました。

今後の活動予定につきましては、追悼式の開催、第三回総会の開催、会報の発行が承認されました。

総会に引き続き、中野孝之助盛岡市議会議員の司会により、米内光政会・吉丸蓉子副会長による「米内光政の横顔」と題した講演がおこなわれました。

米内光政の人柄にせまる吉丸副会長の大変興味深い講演内容に、ご出席の皆様は熱心に聞き入り、あっという間の一時間半となりました。

最後に中野市議による閉会宣言により閉会となりました。



第２回総会

■米内光政をめぐる人々　Ⅱ
――元陸軍中将　樋口季一郎を中心に

平　野　ユキ子

太平洋戦争の勃発は、日本海軍の良識的な判断による『開戦反対』に対して、『陸軍の暴走』があった…とする見方があり、私も前回それに近い書き方をしました。しかし、実は当時の陸軍が『横暴』であったとすることは出来ません。今回は、誤解があってはいけないとの反省から、当時の日本軍人の行いの例を具体的にあげてみたいと思います。

もともと日本の軍隊は当時の諸外国の軍隊に比べて、非常に統制の取れた軍隊で規律を守ることでは有名でした。本年二月に勃発したロシアのウクライナ侵攻を見てもわかる通り、軍隊の侵攻したところでは、略奪、強姦、拷問などの残虐な行為は当たり前に行われるものなのです。軍の侵攻する地域の住民たちは、暴力を恐れて固く門戸を閉ざし、息をひそめているのが普通です。これは戦争になると、普段の倫理や道徳が通用しない恐ろしい世界になる（殺人が奨励される！）からと思います。

また今のロシアのウクライナ侵攻で原子力発電所への破壊工作が行われたとの報道がなされました。

戦争にもルールがあって、原子力に限らず、発電所や病院等一般人のための施設は、攻撃してはならないのです。これはジュネーブ協定で決まっていることです。だからロシアのこの行動は明確な国際条約違反です。そもそもウクライナ侵攻そのものが『侵略』であり、国際条約違反と言えます。しかし現実はどうでしょうか。最近は『核兵器』の使用すら仄めかせている始末です。

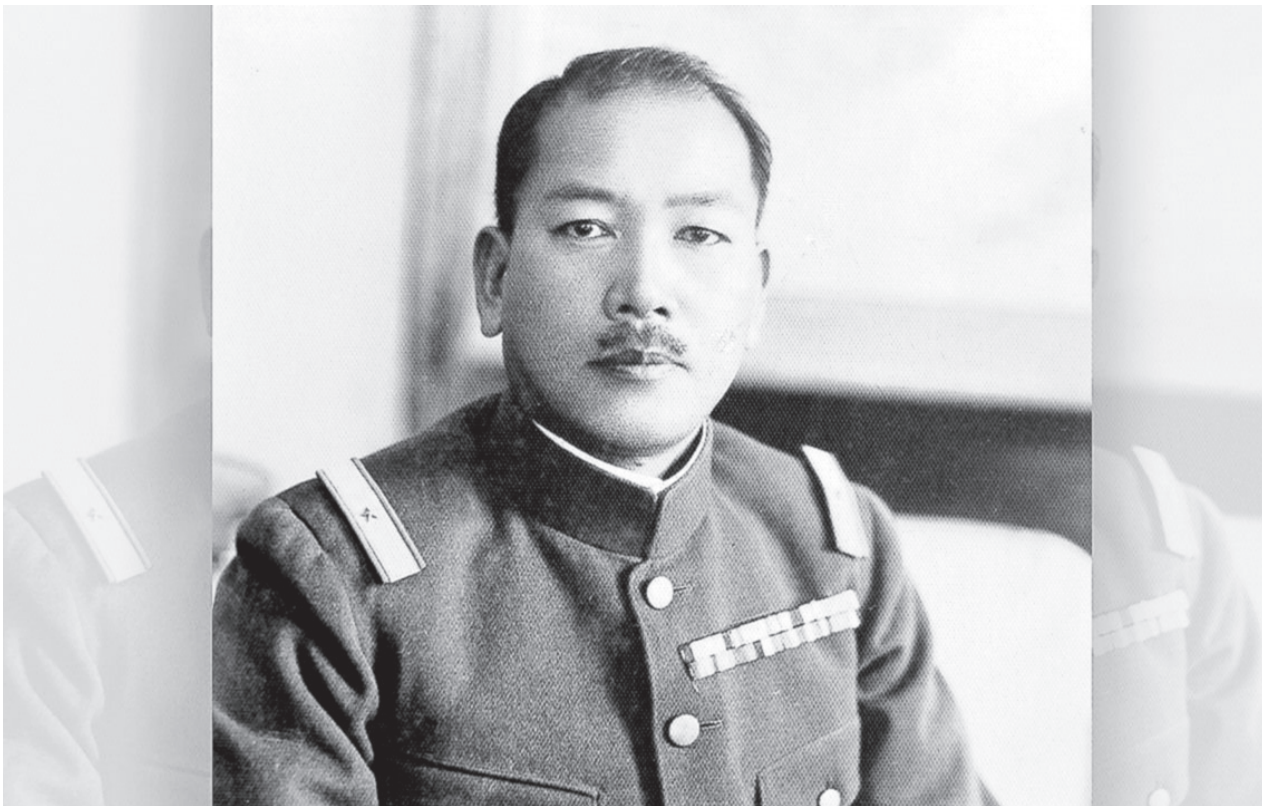
つまり戦争とは、話してわかる世界ではなくなるのです。だからこそ、何があっても戦争だけは回避しなければならない、と思います。戦争になって一番苦しむのは一般国民なのですから。

これを大前提に戦争当時を振り返って話を進めましょう。

当時の日本軍は、軍とはいえ横暴なふるまいをせず、海軍のみならず陸軍もおおかたは軍律を守り地域住民を脅かすこともなく、むしろ侵攻以前より治安を整えるなどして地域住民を守ったので、日本軍の侵攻・占領した地域では、住民は安心して門戸を閉ざすことなく暮らすことが出来た、と言われています。

日本の軍人で人道的に立派に振る舞い、人々を感動させた実話は数々ありますが、今回は陸軍からの一例として『樋口季一郎元陸軍中将』のエピソードをご紹介いたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊



樋口季一郎元陸軍中将

樋口は一八八八年生まれの兵庫県淡路島出身。一九一八年陸軍大学校を卒業後、ロシア語が堪能だった樋口は、ロシアのウラジオストク、ハバロフスクの特務機関に在籍、その後ポーランド公使館付武官、歩兵第四五連隊長、満州国のハルピン特務機関長を経て、一九三八年、五〇歳の時に、これから紹介する『オトポール事件』に遭遇する。

ロシア語が堪能だったといえば、米内光政もロシア駐在を経験してロシア文学に親しみ、電話でロシア人と会話できるほどロシア語が堪能になった、海軍内では随一の人物と言われていたので、恐らくどこかで接点があったかもしれません。

…一九三八年、満州とソビエトの国境の地、シベリヤ鉄道の駅、『オトポール』。

氷点下二〇度を超えるこの極寒の地で、およそ二万人ともいわれる難民が立ち往生していた。ナチスの迫害を逃れてドイツやポーランドからやってきたユダヤ人である。彼らはドイツからポーランドを目指したのだが、ナチス・ドイツに配慮したポーランド政府は入国を拒否したため、彼らはソ連へと向かったのだ。

当初、ソ連はシベリヤ開拓の労働力としてユダヤ人を使おうと考えて入国を認めたのだが、その多くが都市部生活者で農業経験がなく、目論んだほどの労働力にならないと分かり、入植を拒否するようになった。一方満州国も、当時日本とドイツが防共協定を結んでいたため、満州国の承認国であ

るドイツとの関係上好ましくないとの配慮から、満州国外交部は彼らの入国を拒否したのだった。こうして難民と化したユダヤ人たちは満州国の国境のシベリヤ鉄道のオトポール駅で極寒の中、食べ物もなく飢えと寒さで『死』に直面することとなった…。

この窮状を見て、この凍死寸前のユダヤ難民の命を救ったのは、当時ハルピン特務機関長であった樋口季一郎少将だった。樋口は、『全責任は私がとる！』と明言し、満州国外交部に掛け合い、ビザの発給を働きかけた。更に彼は当時の満鉄総裁だった松岡洋右を説得し、ハルピン迄ユダヤ人を特別列車で、無料で輸送することを認めさせた。

こうして樋口の働きで発給されたビザ、そして開かれた「ヒグチルート」と言われるルートを使い、およそ二万人*ともいわれるユダヤ人が満州国を経て上海やその他の地域からアメリカへと脱出でき、救われた。この出来事は「オトポール事件」と呼ばれている。（*この数には諸説ある）

これはリトアニアのカウナス領事館に赴任した杉原千畝がおよそ六〇〇〇人の命のビザを発給する二年前の事である。

この時の樋口の働きは、「私が全責任を持つ」と、あくまでも彼一人の独断であった。外務省の方針に逆らってリトアニアで、ビザを発給した杉原千畝と同じである。

（『指揮官の決断　満州とアッツの将軍樋口季一郎』早坂隆：文春文庫）

さて、こうした樋口の行動に対して、ドイツ政府から日本政府に対して、抗議書が届けられた。これを受けて外務省や陸軍省では、樋口の行動を非難する声が上がり始めた。ポーランドがドイツの目を気にしてユダヤ人の入国を拒否したことなどの当時の状況を考えれば、樋口自身もよく分かったうえでの行動であり、従って全責任を取ると明言したのだ。

さて関東軍内では樋口の処分を求める声が高まる中、樋口は、関東軍司令長官の上田健吉大将に、次のような書簡を送ったという。

「小官は小官の取った行為を決して間違ったものではないと信じるものです。日本はナチス・ドイツの属国ではありません。たとえドイツが日本の盟邦であり、ユダヤ民族抹殺がドイツの国策であっても、人道に反するドイツの処置に屈するわけにはいかない…」。

そののち満州国軍司令部に呼び出された樋口は、東条英機参謀長に会い、このように言った。

「参謀長、ヒトラーのお先棒を担いで弱い者いじめをすることが正しいとお思いですか。」

（『指揮官の決断　満洲とアッツの将軍樋口季一郎』早坂隆、文春文庫要約）

樋口がナチスの反ユダヤ政策に対して批判的だったのは、ドイツやポーランドに駐在武官として赴任した際、寄宿先を探すものの東洋人差別によってことごとく断られる中、ユダヤ人家族だけが温かく迎え入れてくれたと

いう経験をしているからだともいわれている。

私は前回の寄稿文でも書いたが、第二次世界大戦以前は「人種差別」は当たり前だった。東洋人も有色人種として欧米では差別されていた。或いは蔑視されることが普通だった。植民地にされたアジアの人々は、搾取されて当たり前の世界だったのである。日本はこれに一石を投じた。

さて、樋口季一郎の言い分を聞いた東条英機は、「よく分かった。尤もである」として彼を処分しなかったばかりか、結局は昇進させたのだ。樋口は少将から中将となった。

東条英機は、戦後『東京裁判』に於いてA級戦犯として裁かれ、死刑になったので、よく言われないが、彼も人道に基づいた立派な考えを持っていたと私は思う所以（ゆえん）である。東条英機は死刑執行の際も従容として臨み、敵国アメリカにも感謝の言葉を残している。もっと評価されてよい人物であると思う。そして東条英機の戸籍は岩手県であることを思えば私も岩手県人の一人として、そのような彼を誇りに感ずる次第である。

また「ヒグチルート」のもととなる鉄道輸送を認めたうえ、無料にした松岡洋右もまた、立派な人道主義者であると思う。松岡洋右も東条英機同様よく言われないが、本来は人道的で立派な考えを持ち、行動していた（ここでは詳述は避けるが）と感じる。

この「オトポール事件」の二カ月前、ハルピンで第一回極東ユダヤ人大会が開催されたことがある。その際、会長のアブラハム・カウフマンに招待され来賓として出席した樋口は次のように演説した。ドイツのユダヤ人迫害が日に日に強まる中の出来事である。

「…ユダヤ人諸君はお気の毒にも　世界いずれの場所においても「祖国なる土」をもたぬ。

ユダヤ人はその科学　芸術　産業の分野において他のいかなる民族に比べても劣ることなき才能と天分を持っていることは歴史がそれを立証している。

二〇世紀の今日、世界のどこかでユダヤ人を追放する様を見ることは人道主義の名において　また人類の一人として私は心から悲しむものである。

ある一国は好ましからざる分子として同胞であるべき人々を追放するという。追放せんとするならばその行く先を明示し、あらかじめそれを準備すべきである。当然の措置を講ぜずしての追放は刃を加えざる虐殺に等しい。

私は個人として心から、かかる行為を憎む。

ユダヤ人追放の前に彼らに土地、すなわち祖国を与えよ！」

このとき集まっていたユダヤ人は千人余りと言われるが、樋口のこの演説に割れんばかりの拍手と歓声が起こり、一人のユダヤ人青年が感激のあまり樋口の前に出て来て跪（ひざ

まづ）いたという。

このニュースは従軍記者などの取材により、世界中に広まりドイツから厳重抗議が来る。

このようなときに起きたのが「オトポール事件」であった。普通は国や軍の方針に逆らった樋口は処分を受けて当然と言えるが、この時の東条英機の判断、及び松岡洋右等を始めとする日本人の判断は人道に基づいており大変立派であったと評価できる。

極東ユダヤ人協会の会長アブラハム・カウフマンの息子テオドル・カウフマンは自著で次のように樋口を評している。

「樋口は世界でもっとも公正な人物の一人であり、ユダヤ人にとって心の友人であったと考えている」（『The Jews of Harbin Live on in My Heart』）

当時は人種差別が当たり前だったと述べた。実は第二次世界大戦以前、国際組織として在った「国際連盟」の議会において日本の牧野伸顕全権大使が、

「…まず国連憲章には　人種の平等を謳（うた）うべきである」と訴えた。

が、当時の世界は植民地支配真っただ中。世界の大多数が支配されている側、という状況で支配者側の白人たちに否決されてしまった。

当時はアメリカでも黒人への差別がひどかった事を思い起こして頂きたい。人種の平等を世界で一番早く「公」に訴えたのは日本人だった、という事は、覚えておきたいものだ。

…「大東亜戦争（第二次世界大戦）は大植民地主義に終止符を打ち、白人と有色人種の平等をもたらし、世界連邦の基礎を築いた。」

とイギリスの歴史学者Ｈ・Ｇ・ウェルズは述べている。

（『世界史概観』長谷部文雄・阿部知二訳、岩波新書）

ユダヤ人救出劇として、杉原千畝の「命のビザ」が有名だが、これはたまたま本が出版されて、（私は当時その本を読んで杉原千畝の事を知り、このような人がなぜ広く知られていないのかと、疑問にも残念にも思った記憶がある。）その後、ドラマとして取り上げられ、映像化されたお蔭で広く知られるようになった。そして、教科書などでも取り扱われたとも聞く。

実は杉原千畝は帰国後、外務省から「国の方針に逆らった」ということで冷遇を受け、外務省を辞めてひっそりと暮らしていた。

大戦後、ユダヤ人は『イスラエル建国』が叶い、建国にあたって様々な検証が行われた。検証にあたって「ユダヤ人の恩人」の顕彰のために杉原千畝の消息を訪ねて、日本の外務省を訪れたイスラエルの調査員は外務省からけんもほろろの扱いを受けたというエピソードもある。外務省は杉原には冷たい態度だった。イスラエル政府は

民間の会社にいた杉原千畝本人を探し出した。杉原千畝はイスラエル政府からユダヤ人を救った人だけに贈られる「諸国民の中の正義の人」の称号を授与され、「ヤド・パシェム賞」を受賞した。杉原は名誉回復を四四年後に成し遂げたのだ。

樋口季一郎も戦後、イスラエル建国功労者として「黄金の碑（ゴールデンブック）」にその名を記され、イスラエルに於いて永く顕彰されることとなった。杉原は知られるようになったが、樋口も日本でもっと名が知られても良い立派な軍人だと思う。

さて、樋口はハルピン特務機関長の職を終えたのち一九四二年、札幌の北部軍第五方面司令官に赴任する。この時から樋口はアッツ・キスカの戦い、そして占守島（しゅむしゅとう）の戦いという北方の戦いに直面することになる。

北海道北方のアリューシャン列島の、アッツ島とキスカ島。当初、この地には日本兵はかなり配置されていたが、その後南方へ兵士を置くこととなり北方は手薄になった。そこへアメリカ艦隊が攻めてきたのだ。アッツ島は山崎部隊長及び守備隊員数千名、キスカ島は樋口司令官と守備隊員五二〇〇人。

残念ながらアッツ島は勇猛に戦った山崎部隊長も隊員も玉砕してしまう。

キスカ島ももう撤退しか道がないところまで追い込まれた。しかし何しろ時間が無い。アメリカ軍はすぐそこに迫ってきている。

樋口はこの時「銃を捨てろ！」と命令する。「とにかく早く逃げろ！」と。これは当時の司令官ではありえない命令だった。軍人として武器を捨てて逃げるという事は信じられない事だ。だがこれは実に合理的だった。武器を捨てたおかげで身軽になった兵士たちは、キスカ島に防備軍がいるかのような工作まで施したうえ、一時間ほどで艦に乗り込み撤退することが出来たのだ。お蔭で、まだ防備軍がいると思い込んで攻め込んできたアメリカ軍は無駄に弾を数万発も撃ったという。

こうして樋口は、アメリカ艦隊に包囲されて玉砕必至と思われたキスカ島守備隊五二〇〇人の無血脱出を成功させた。これは『奇跡の脱出』と呼ばれている。

この後、キスカ島を無事逃れた兵士たちの多くは占守島へ行くことになる

一九四五年二月アメリカのルーズベルト、イギリスのチャーチル、ソ連のスターリンがソ連領クリミア半島のヤルタで会談する。このヤルタ会談でルーズベルトはスターリンにドイツ降伏の三か月後に「日ソ中立条約」を破棄して対日参戦するように要請した。ルーズベルトはその見返りとして日本の領土である千島列島、南樺太そして満州に日本が有する諸々の権益をソ連に与えるという密約を交わした。

こうしてソ連はその密約により『日ソ不可侵条約』を一方的に破棄して満州、千島列島、樺太に侵攻を開始することとなる。

一方、二発の原爆が投下され日本がポツダム宣言を受諾すると満州、樺太に侵略したソ連軍は猛攻撃を続け、各地で殺戮、略奪、強姦の限りを尽くした。その大混乱のため、満州における残留孤児の問題も発生することとなった。

（『*大地の子』山崎豊子著：文芸春秋）

*この作品は創作であり主人公は架空の人物だが、かなりの取材に基づき事実に即して書かれている。山崎豊子氏は一九八四年から胡耀邦総書記に三度面会のうえ取材許可を取り、当時外国人に開放されていない農村地区や政府施設を周り三〇〇人以上の戦争孤児から取材したうえで執筆がなされた。この時、胡耀邦総書記から「事実に基づき中国の良いところも悪いところも書いてよい」との許可を得られたと言う。その後胡耀邦総書記が後退した後は、取材はおろか入国も許されなくなった。山崎豊子氏は『…誠に涙なくしては出来ない取材だった。あのような取材が出来て、私は本当に幸運だった。…（要約）』と著書のあとがきと、取材の事を詳述した書、「『大地の子』と私」で述べている。

さて、そんな裏切りも分からずに何とかソ連に和平交渉を頼もうとしていたのが当時の日本の実情だったわけで、ロシア語が堪能でロシア人とも親しくなっていた米内光政もそう思っていた一人かもしれない。（ヤルタ会談の密約などの外国の対応を見ると、どうも日本人はお人好に見える。）

私は、大学時代にイギリス人の旅行作家が書いた旅行記で「ロシア人は個人としては親しくなると義理堅いし約束も守るが、『国』となると全く信用が出来ない、約束も簡単に破る。これは常識だ」と書いてあるのを読んでハタ、と得心したことがある。

さて、八月十五日の玉音放送で*終戦。武装解除の命が下された。しかし、実はそれで戦いは終わらないのが諸外国では当たり前のようだ。しかし前述したように日本軍は、きっちり約束を守って武装解除を命じた。しかしそれによって、武装して侵攻してきたソ連軍に民間人が暴行、強奪、強姦とあらゆる暴力を受け混乱の極みに達した所が生じた一方、武装解除という大本営の命に逆らって「民間人がいる間は、武装解除は出来ん！」と言って、女性と子供が無事避難するまで守り抜いた所もあった。場所により終戦前後でかなり明暗が分かれたと言う。

ところで、樋口は大本営の命に逆らって終戦（*八月十五日）後に戦った方に属する。樋口は北方に侵攻するソ連軍への「断固反撃」を命じソ連の北海道占領の野望を砕いて占守島（しゅむしゅとう）での日本軍最後の勝利をもたらしたの

だ。

*終戦は八月十五日としているのは日本と韓国の二国くらいである。因みにソ連（＝ロシア）と中華人民共和国は九月三日。アメリカは九月二日を終戦日としている。

さて、戦争が終わったとして日本が「武装解除」を命じたのちも、ソ連軍は千島・樺太という日本固有の領土にまで上陸してこようとしていた。こうして八月十八日、千島列島の一番北のはじにある占守島に攻め込んできたのだ。

この時は深夜で、「戦争は終わった、武器を捨てよ」、と言う本部からの命令で砲弾も火薬と着火線などすべてを外して、敵に渡すよりはと、半分以上海に捨てた後だった。そして最後の別れの盃など交わしたあと、少ない酒でも大いに疲れて酔い潰れてぐっすり寝こんでしまっていた。

そんなところへ、いきなりロシア軍が攻め込んできたのだ！

ドーン！と言う突然の砲弾の音で、目が覚めて何が何やら分からないながら、敵が攻めてきたというのは分かり、樋口季一郎司令長官に指示を仰ぐと、『戦え！断固敵対すべし！』との命令が下った。

武装解除ということで半分以上の武器も戦車も分解している中、少ない武器を使いつつ濃霧の中、なんと百発百中で、ソ連軍に過去最大の損害・被害を与えて撤退させたという。

実はソ連軍は一日で占守島を占拠。その後、千島列島を南下。一週間で北海道まで占領…と計画していたと言う。

この辺りは何やら現在（いま）のロシアのウクライナ侵攻と似通っている気がする。ロシアは、ウクライナ侵攻の時に、三日でウクライナの首都のキーウを陥落、ウクライナ全体をひと月以内で落とせると当初目論んでいたという。しかし、現実はどうであるか…。予想だにしなかった猛烈な抵抗にあい、いまだに攻めあぐねている。恐らく民族の存亡の危機にあるとき、その民族の『抵抗の凄まじさ』というものを分かっていない、とも言える。これは余談であるが、アメリカのベトナム戦争の時も同じことが言えると思う。

さて一方、大本営の命令通り、武装解除して戦わなかった千島や樺太はソ連軍に占領されてしまい、いまだに北方領土問題を引きずっている。

この樋口による占守島での勝利がなければ、北海道と東北はロシアの占領下になっていたかもしれず、日本は、現在の朝鮮の分断（北朝鮮と南朝鮮＝韓国）のようになっていた可能性は高いのです。

これら三つの「奇跡」をもたらしたのは常に人道に立脚した樋口の決断であったと言えます。人としての正しい道を貫いた樋口季一郎の「志」を学ぶことは現代に於いてもとても大切な事と思われます。

樋口季一郎は、戦犯として裁かれることを覚悟していたのだが、「オトポール事件」で命を救われたユダヤ人たちがロビー活動をし、マッカーサーに働きかけて樋口のソ連への身柄引き渡しを阻止した。既に述べたが、樋口季一郎は『ゼネラル・ヒグチ』としてイスラエル建国に貢献した人の名前が刻まれるゴールデンブックに名前を刻まれ、顕彰されている。ゴールデンブックには樋口季一郎のほか安江仙弘*（のりひろ）陸軍大佐の名前も刻まれている（安江大佐は、帝国陸軍におけるユダヤ人問題の専門家。詳述はここでは避ける。）*

戦後七〇年以上を経た現在（いま）、私たち日本人はいたずらに自虐史観に囚われることなく、正しくかつての日本人の行いを振り返り、誇りをもってこれから新たに平和な世界を創り上げていくように進んで参りたいと願う。

日本は、大東亜戦争（第二次世界大戦）に敗れた。が、それ以上に精神史的に敗北を喫した気がする。戦後の歴史観により日本人は「先の戦争における『反省と謝罪』を繰り返してきた。」ことに一九九五年の終戦五〇周年の国会謝罪決議以来、『侵略史観』が定着し、歴代の首相はそれを踏襲してきた。つまり『自虐史観』が定着してしまった。

だが、むしろ海外では日本人の在り方は高く評価されている。先に述べたアメリカの歴史学者H・G・ウェルズのほか、フランスの文壇の巨人とされるアンドレ・マルローもその一人である。

マルローはフランスのレジスタンス旅団長としてナチスに抵抗、戦後フランス共和国の情報相、文化大臣にもなった人であり、一九六二年、一九七四年にフランス文化担当国務大臣として訪日、日本文化に親しんでいる文武両道の人であり、武士道を「ル・ブシドー」と呼んでいる。

そのアンドレ・マルローは日本の『特攻隊』についてこのように述べた。

「彼らには権勢欲とか名誉欲などはかけらもなかった。祖国を憂う貴い熱情があるだけだった…。」

この発言は、戦時中は特別操縦見習士官であり戦後はリヨン大学客員教授であった長塚隆二氏が、パリ郊外にあるマルロー氏の家を訪ねたときにマルロー氏が語った言葉である。以下に、より詳しい内容を引用する。

「日本は戦争に敗れはしたが、その代わり何物にも代えがたいものを得た。それは世界のどんな国も真似のできない『特別攻撃隊』である。スターリン主義者たちにせよ、ナチス党員にせよ、結局は権力を手に入れるための行動であった。日本の特攻隊員たちはファナチックだったろうか。断じて違う。彼らには権勢欲とか名誉欲などかけらもなかった。祖国を憂える貴い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為、そこにこそ真の偉大さがあり、逆上と紙一重のファナチズムとは根本的に異質である。人間はいつでも、偉大さへの志向を失って

はならないのだ。

戦後にフランスの大臣として初めて日本を訪れたとき、私はそのことを特に陛下に申し上げておいた。

フランスはデカルトを生んだ合理主義の国である。フランス人の中には特別攻撃隊の出撃数と戦果を比較して、こんなに少ない撃沈数なのになぜ若い命を、と疑問を抱く者もいる。そういう人たちに私はいつも言ってやる。『母や姉や妻の命が危険にさらされるとき、自分が殺（や）られると承知で暴漢に立ち向かうのが息子の、弟の、夫の道である。愛する者が殺（あや）められるのを黙って見過ごせるものだろうか?』と。私は、祖国と家族を想う一念から恐怖も生への執着もすべてを乗り越えて、いさぎよく敵艦に体当たりをした特別攻撃隊員の精神と行為のなかに男の崇高な美学を見るのである」

（「特攻」第8号神坂次郎『特攻―若者たちへの鎮魂歌』ＰＨＰ研究出版）

私はマルローが、ナチスとレジスタンスとして戦ったフランス人であり、その見解であることが一層興味深いと感じるとともに、『人間として真なるもの』は理解されるのだと思っている。

さて、イギリスの歴史学者Ｈ・Ｇ・ウェルズが「大東亜戦争（第二次世界大戦）が大植民地主義に終止符を打ち、白人と有色人種の平等をもたらした…」と述べたことを先に記したが、著名な文明論者であるイギリスのアーノルド・トゥインビーは、大東亜戦争で日本が歴史に残した意義を次のように指摘している。

「アジアとアフリカを支配してきた西洋人が過去二〇〇年の間信じられてきたような不敗の神ではない事を西洋人以外の人種に明らかにした」（オブザーバー紙、一九五六年十月二十八日付）

また、アメリカのＪ・Ｃ・レブラ教授は、東南アジア全域の独立運動について、日本軍占領期間中に身につけた自信、軍事訓練、政治能力が西洋植民地支配に対抗する決定力になったと述べ、

日本による占領下で、民族主義、独立要求はもはや引き戻せないという事を、イギリス、オランダは思い知ることになる」

（『東南アジアの解放と日本の遺産』秀英書房）

と評価している。

この評価にあるように米、英、仏の学者だけではなく、数百年にもわたる西洋植民地主義の支配下にあったアジアの諸民族もまた日本に勇気づけられたのであり、それら諸国の独立指導者は、異口同音に日本の果たした歴史貢献に感嘆、称賛している。

インドネシアの元首相、モハマド・ナチール氏は、インド

ネシアの独立戦争に日本軍の軍事訓練が有益であったことに感謝し、「大東亜戦争と言うものは、本来なら私たちインドネシア人が独立のために戦うべき戦争だったと思います」（阿羅健一『ジャカルタ夜明け前』勁草書房）とまで言っている。インドネシアでは、今でも独立記念日に日本の軍歌を歌うという。

インドネシアには独立のために戦った英雄を葬る英雄墓地が各地にあるが、ジャカルタのカリバタ英雄墓地を始めとする各地の英雄墓地にインドネシア独立のために戦った日本兵がインドネシア人兵士と共に葬られている。

ビルマの独立運動家バー・モウは、『ビルマの夜明け』の序文で「真のビルマの解放者は東条大将と大日本帝国政府であった」と記している。

また、一九九一年十二月、マレーシアのケランタン州コタバルで日本軍のマレーシア上陸五〇周年を記念する特別式典が行われ、戦争博物館が設立された。その際、ロザリー・インバック州副知事が次のような挨拶をしている。

「ここコタバルは日本軍最初の上陸地です。私は戦争博物館の館長として記念行事を担当しましたが、多くの人々にこの貴重な出来事を長く記憶にとどめて頂きたいと願っています。」

戦後五〇周年で、日本に自虐史観が蔓延したことと比して天と地ほどの差を感じる。

インドもまた、同じく日本が独立の機運を高め助けてくれたことに感謝している。

インド法曹界の長老バラバイ・デサイ博士は日本軍関係者について「インドはまもなく独立する。この独立の機会を与えてくれたのは日本である。インドの独立は日本のお蔭で三〇年も早まった。インドだけではない。ビルマもインドネシアもベトナムも東亜民族はみな同じである。インド国民はこれを心に深く刻み、日本の復興には惜しみない協力をしよう。」

一九八九年に昭和天皇が崩御された際には、日本人は二日間の喪に服したが、インド人は三日間の喪に服した。

こうしたことを踏まえると、樋口季一郎のような立派な日本軍人はたくさんいてアジア各国にその影響を及ぼしている、と言えると思います。紙面の関係から「樋口季一郎」の紹介のみとなりましたが、具体的に名前を挙げると実に多くの日本人がアジア諸民族のために立派に戦っています。

そもそも日本は第二次世界大戦を『大東亜戦争』という名前で呼んだのですが、これは『大東亜＝東アジア』を欧米列強から解放する、という意味が込められています。

東京裁判の時、十一人の判事の中で、インドのパール判事は、「…この戦争は日本の侵略戦争ではない。…ＡＢＣＤ包囲網という経済封鎖をされたら日本人は飢えて死ぬしかなくなる。この戦争は決して侵略戦争ではない。自衛のための戦争である…（要約）」として「全員無罪」を主張した。

東京裁判の十一人の判事は全員戦勝国側の判事だったことに加え、国際法の専門家はパール判事一人だけだったことを思えば、最初から判決は決まっていたようなものである。

本年七月、残念なことに安部晋三元首相が凶弾に倒れるという事件が起きた。このニュースが世界に流れると、インドは弔意を表して国旗を半旗にして掲げ弔意を表した、日本よりも先に…。半旗を掲げた国はアメリカを始め、ほかにもたくさんの国々が半旗を掲げて弔意を表した。

安部元首相と言えば、かつてこのように述べていたことがある。

「…あの戦争には何ら関わりのない私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません…。」

まさにその通りである。

戦後七〇年以上を経た現在（いま）、私たち日本人はいたずらに自虐史観に囚われることなく、正しくかつての日本人の行いを振り返り、誇りをもって、これから新たに平和な世界を創り上げていくように進んで参りたいと願う。

特にこれからの日本の未来を担う子供たちが、未来に希望を持ち、それぞれの夢に向かって自信と誇りを持って頑張ることが出来る、子供たちの誰もが夢に向かって頑張ることが出来る、そういう日本の未来を創らねばならない。と、私も「高齢者」になった今、深く感じる。正しい歴史は正しく、後世に繋いでいかなければならないと、今こそ願うものである。

平和は、人から与えられるものではない。自分たちで築き上げるものに他ならないのである。

参考図書・文献（文中に注釈した原典）
『日本人はなぜ世界から尊敬され続けるのか』黄文雄：徳間書店
『世界から絶賛される日本人』黄文雄：徳間書店
『樋口季一郎』、『インドネシア独立』You Tube, Wikipedia
『大地の子』山崎豊子：文春文庫
『「大地の子」と私』山崎豊子：文春文庫
『世界から恐れられた七人の日本人―封印された大戦の偉業』丸谷元人：ダイレクト出版
写真
『もう一人の東洋のシンドラー』岡部伸：nippon.com



■米内さんの銀行命名顛末記

駒木　忍

米内大将の個人的エピソードの一つと、その顛末を紹介したい（以下、米内さんと記す）。

十年以上も前のことである。親戚の者が仕事で長崎に赴任した折、彼が岩手出身と分かると、地元の「親和銀行」の命名をしたのは米内さんだと教えられ、思わぬところで母校の大先輩が、はるか長崎で多くの人たちから親しまれた偉人であったことを知り、驚いたという。

このことは、阿川弘之著『米内光政』にも、いきさつが概略次のように記載されている。

米内さんは、東北人らしく寡黙ながら誰からも好意をもたれる人柄だった。特に若い時から三度赴任した佐世保は本人も第二の故郷といったように知人も多く、海軍大将で海軍大臣三期目だった昭和十四年に、地元経済界から、次のような依頼があった。

明治十六年、早岐起業会社として長崎に創業し、明治四十年、佐世保銀行と改称した同行と、大正八年創業の佐世保商業銀行との国策による合併に際して、新銀行の命名をしてほしいとの要請に、米内さんは多忙な中を「親和銀行」と軍人らしくない名前をつけた。

ちょっと変わった名前に違和感をもつ人もいたが、正式に「親和銀行」と決まり、戦後も九州の有力地銀として発展した（それまで紆余曲折があったが、令和二年に長崎市の地銀の「十八銀行」を吸収合併し、「十八親和銀行」と商号変更して、本店を長崎市に移した）。

一般には、二代目頭取の北村徳太郎（戦後、運輸大臣や大蔵大臣を歴任）が、時の平沼騏一郎内閣のスローガン「神と国民、国家の和合が人間社会に良い結果をもたらす。〝一億総親和〟から命名した」との説がある。

どちらが本当かと、私の地元盛岡では確認できず、同行に直接問い合わせたところ、「当行では後説が正式な通説となっており、米内さんが揮毫された〝親和〟という額は、今も本店に掲示されています」との回答があり、後日送られてきた『創業百十年創立五十年親和銀行史』（深潟久著、平成三年一月刊）の該当ページのコピーには、概略次のようないきさつが記載されている。

北村は著書『思恩山房記』に、一億総親和という当時使われていた平沼内閣時代の言葉から「親和」と自分が名づけたと出典を述べている。それがいつの間にか米内さんが命名したこととして広まったのは、同行に掲示された額だけでなく、阿川弘之著『米内光政』に前説が書かれたことによる、と、前記の『同行百年史』でも取り上げて、その誤りを指摘

した形で、同行史に特に「親和の名称」の項目を立てて、いきさつを明記したという。

以下、私の偏見を記す。

阿川の同書の参考文献リストにある『親和銀行二十年史』（昭和三十四年刊）の内容は、『同行百年史』と同じと思われる。

阿川の同著は、昭和五十二年七月から翌年八月まで『週刊読売』に連載されたので、遅くとも昭和五十年頃から多くの関係者に会って裏付けの取材をした結果、同行史と違う命名のいきさつを書いた。小説であっても米内の名誉にかかわるので、事実を曲げて書いたとは思われない（北村は取材時には逝去されており、直接本人に取材できなかった。また、『思恩山房記』は北村が八十歳になった昭和四十一年に刊行され、阿川の同書参考文献リストには記載されていない）。

北村は政治家として数々の業績があるが、野党に属し、当時の時代背景から、出身会社が軍人の命名だったというのは、大蔵大臣などの立場上好ましいとはいえず、自分が命名したとして辻褄を合わせたとも考えられる。

いずれにしても、たとえ依頼されたのが揮毫だけだったにしろ、米内さんが行名を命名したと違和感なく巷に伝わったことは、いかに人柄が愛され尊敬されたかを物語るものであり、郷土の偉人として誇りに思いたい。

（盛岡市在住）



■米内光政とその周辺②　息子を厳しく育てた母

米内の母トミ（盛岡の松尾家）は、ほとんど一人で娘ヒサ子と息子光政を育てたも同然だった。早くから夫の受政（なかまさ）が出奔してしまい、盛岡にいなかったからである。

人望があった受政は、明治二十二年（一八八九）の市長選でトップになり初代市長に選ばれたが、横やりが入り心ならずもなれず、そのため受政は、上京し発明の道に入ってしまったので、生活費を送ってくるはずもなかった。

母トミはそのため、二人の子どもの養育に並々ならぬ苦労をした。幸い手芸や裁縫に秀でていたために、それで毎日の生計を立ててはいたが、いつもぎりぎりだった。夫がいないだけに、二人の子どもたちを厳しくしつけた。姉ヒサ子も光政もそれを分かっているせいか、いくら厳しくても母トミに口ごたえなど一切しなかった。

当時の米内家の様子を、のちに教育者になった高藤太一郎が次のように描写している。

「私が訪ねていくと、お母さんは薄暗いランプの下でお針をしているし、米内君と姉さんはお母さんの前に机を置いて勉強している場面によくぶつかったものでした。お母さんは謙遜で落ち着きがあり、しかしその反面、非常に明朗なかたでした…」

そんな家計を思って光政が進んだのは、金のかからない海軍兵学校（軍人の道）だった。母トミも光政の海軍志望を後押しして励ました。

明治三十四年（一九〇一）、光政が海軍兵学校を終えてからというもの、トミはいつか息子と一緒に暮らすことを夢見ていた。少尉に任官したとはいえ、光政はまだ母を呼べるような状態ではなかったが、父受政は十数年前から東京にいたので、父とともに三人の東京での生活が始まった。親子三人で暮らしていたうえに、発明好きの父の研究費まで光政が出していたのだから、光政の負担は決して軽いものではなかった。

あるとき母トミは、それを見かねて光政にこんな提案をした。

「この貧乏世帯から、お父さんの研究費を出すのは大変だから、しばらくの間、研究のほうは断念してもらおうじゃないの」

そんな母トミの提案にもかかわらず、光政は黙って続けさせている。

しかし、結局は実ること少なく昭和二年（一九二七）秋、父はこの世を去った。

しっかり者の母トミは、米内家の家計を一手に握っていた。それは光政が海軍大臣になっても総理大臣になってからも同じだった。盛岡中学以来の友人で、のちに衆議院議長になった田子一民が米内家に寄付のお願いにうかがった時のこ

と、用件を了解した米内は奥の方に行き、しばらくして一枚の紙幣を手にして、田子にこう言っている。

「今、母から小遣いをもらってきたので、少ないけれど、これで我慢してください」

田子は、米内の母トミが米内家の大黒柱であることを改めて知ったという。

トミは息子光政よりも長生きをしたので、息子の死を看取っている。光政が亡くなったのは、敗戦後の昭和二十三年（一九四八）四月二十日のことだった。六十八歳と一か月だった光政の病気は、神経痛の後に襲ってきた帯状疱疹だった。

息子の死の直前、枕元で黙祷しながら、いつまでも頭を上げようとしなかった母トミの姿は、居合わせた人たちの悲しみをいっそう誘った。火葬場へ向かう息子の棺に取りすがり「光、光、なんでわだしのごと残して先に逝ったんだ?」と泣きながら話しかけていたという。先に夫を亡くし、今まで一家の頼みとし心の支えともした息子を今また失ったトミの悲しみは、いかばかりだったろうか。それから五年後、トミもまた静かにこの世を去っている。（母トミは、左上の写真の二列目右）

（『いわて人物夜話』を加筆訂正。米内光政会編集部）



米内光政 慈愛の家族写真

戦時中撮影 子孫が所有

先人記念館（盛岡）に寄贈へ

1942（昭和17）年7月に東京都内の自宅で撮影されたとみられる米内光政（左奥）の家族写真。5人の子どもたちら家族と笑顔で写っている

盛岡市出身で第37代首相の米内光政（1880～1948年）が、太平洋戦争中に家族と撮影した写真が見つかった。米内の三女の故竹中和子さんの家族が本県の親族に託したもの。本人と実母、和子さんら5人の子どもが納まった珍しい1枚で、関係者は「父親の一面を垣間見ることができる資料」と希少性を評価する。3月中旬に市先人記念館に寄贈される予定で、反戦主義を貫き、戦争終結に尽力した信念の人の思いを伝えていく。

◇　◇

盛岡市内で22日、米内の親族でNPO法人スペシャルオリンピックス日本・岩手理事長の平野ユキ子さん＝同市＝と、米内光政会の藤井茂会長（72）、吉丸登子副会長（78）が面会。計150枚超が収められたアルバムをめくり、米内が生きた激動の時代に思いをはせた。

アルバムは和子さんの息子で大手ゼネコンの竹中工務店（本社大阪市）の竹中統一名誉会長が所有していた。昨年末、自宅を整理した際に、本県の関係先への寄贈を決めた。

写真の多くは和子さんが、きょうだいや知人らと撮影したものだったが、その中から米内本人が家族と納まった1枚が見つかった。1942（昭和17）年7月15日に東京の自宅で撮ったとみられ、和服姿の米内が5人の子どもたち、母トミさんらとにこやかな表情を浮かべる。

藤井会長は「きょうだいで写真の多くを残していた時期に、つかの間のだんらんを切り取ったものといえる。

今回見つかった写真は全5人がそろっている写真は3月中旬に市先人記念館に寄贈される予定。同館の中核機能を担う学芸員（42）は「米内は海軍の軍服姿などを着た写真が多く、家族写真は限られているのでとても貴重な資料だ」と受け止める。

米内光政（よない・みつまさ）1880（明治13）年、旧盛岡藩士米内受政（ながまさ）の長男として、現在の盛岡市愛宕町に生まれる。岩手県尋常中学校（現盛岡一高）を経て、98（明治31）年に海軍兵学校入学。連合艦隊司令長官や海軍相を歴任し、1940（昭和15）年1月に第37代首相に就任。日独伊三国同盟の締結に反対し陸軍と対立、半年で退陣した。44（昭和19）年7月に再び海軍相となり、戦争終結と海軍解体に尽力した。48（昭和23）年に68歳で病死した。

米内は44（昭和19）年に再び海軍大臣として入閣し、戦争の終結に尽力した。多くの修羅に翻弄された時代にあって、その真髄は今も色あせることはない。平野さんは「大局的な見方ができ、有事にこそ力を発揮できる人だった。写真の発見が、功績を思い起こすきっかけになってほしい」と願う。

岩手日報（二〇二二年二月二三日）

■ゆかりの品・場所のご紹介



岩手町立沼宮内小学校の要請を受け米内光政が揮毫した運動会優勝旗
（昭和13年頃）

■ご寄付のご紹介

会員平野ユキ子様からのご寄付により、記念事業として、円光寺墓碑の改修を行うことができました。
改めて平野様のご厚情に感謝申し上げます。



改修前の墓碑



改修後の円光寺墓碑

■年次事業実施状況

二〇二一年　三月二十四日　役員会および理事会開催
二〇二一年　四月　十八日　墓参実施
二〇二一年十一月二十五日　役員会および理事会開催
二〇二一年十一月二十八日　第二回総会開催



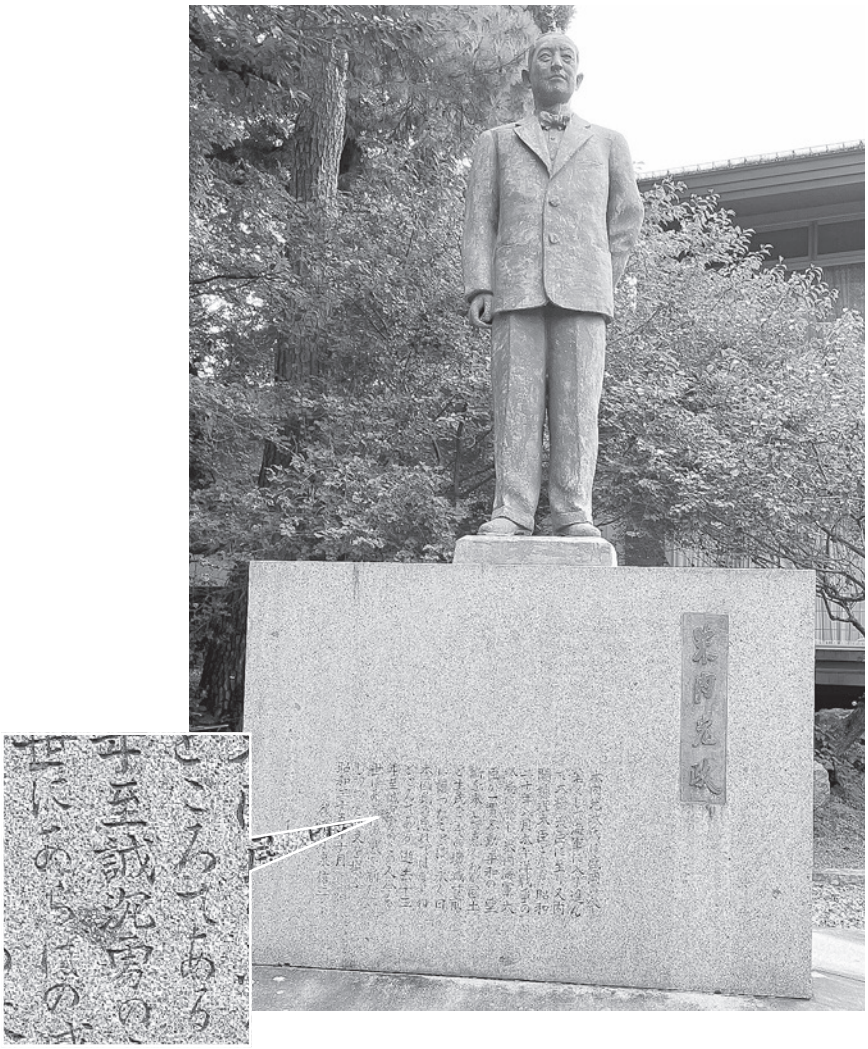
円光寺墓参



米内光政会役員他で円光寺を墓参

表題「至誠沈勇」について

「至誠沈勇」とは、「この上なく誠実で、落ち着いて勇気のある様」を意味する米内光政の人柄を表わしたもの。盛岡八幡宮境内にある崇敬殿前の米内光政像の台座に刻まれた、経済学者（慶応義塾大学塾長）小泉信三による撰文より抜粋したもので、銅像の除幕式は昭和三十五年（一九六〇）十月十日に行われた。



米内光政会会報（二号）非売品

令和四年十一月二十五日発行

発行所　米内光政会事務局

〒〇二〇―〇八八五

岩手県盛岡市紺屋町四―二十四

印刷所　河北印刷株式会社

盛岡市本町通二丁目八―七

令和4年11月